馬場　公彦著

戦後日本人の中国像

日本敗戦から文化大革命・日中復交まで

A5判・724頁・7140円
新曜社
978-4-7885-1204-7

将来の中国が世界にとって脅威なのか、はたまた信頼に足るパートナーシップの相手たりうるのか、という議論は、今世紀初頭における世界的な話題の一つである。特に日本にとって中国との関係は、今後それがどのような形態を成すかには諸議論あるものの、地理的に無関係たりえない、という点は共通の理解としてよいであろう。むしろ、日本における中国論の「賑い」こそが、日中の「密接な」関係を象徴しているようにも思われる。

こうした日本における中国論の「賑い」は今に始まったことではない。本書の対象とする戦後（一九四五年から七二年）の日本でも、中国の行方が注目を集め、様々な議論が飛び交った。この時期は、日中間に正式な国交がなかった、という点で現在とは異なる条件下にあったものの、中国に関する議論が低調であったわけではない。

著者の分析によれば、中国からの情報が極めて限られ、日中の関係が非対称であったことにより、むしろ当時の中国論は研究者の独占を免れ、広く日本の言論界、ひいては庶民や国民に開かれたものであった。中国を研究・分析の対象とする議論の一方で、「何故中国に関わるのか」「どのように中国をみたのか」といった心情や思想に関わる議論もまた、中国を論ずる際に一方の核を成し得たのである。

このように本書は戦後日本で刊行され、一般国民も容易に目にすることが可能であった総合雑誌二十四誌の中から、二千五百本にのぼる中国に関する論考を博捜し、戦後の日本社会における、主に公共知識人による中国認識の形成過程に迫ろうとしたものである。そこには、中国論が中国学者・中国研究者の専有物となってしまった現在の情況に対する著者の問題意識が横たわる。

著者のデータを駆使した実証の一つ一つは極めて興味深いが、ここではそのうち評価が改めて考えさせられた文化大革命に関する当時の論壇の反応を取り上げたい。まず評価が意外に感じたのは、現在では一般に中国国内の原因によって説明される文革勃発が、同時代の論壇では圧倒的に中国を取り巻く厳しい国際環境によるものとされていた点である。我々はともすれば後からの知識で過去を振り返り、意味を付与しがちである。これはその危うさを伝える一例と言えよう。また中国では未だ文革に関する論議がタブー視されていることは知られているが、著者によれば、実は当時の日本での文革論議の内実も、同時代人の証言が乏しく回顧的研究の試みも不十分で、歴史化されていないという。中国の文革研究事情は決して対岸の火事ではないのである。すでに文革の終結から四十年を超え、当時の関係者も少なくなりつつある。しかし、日本における文革論争は日本の中国認識に転機をもたらすと同時に、そこから得られた知見が戦後思想の資源の一部を構成していることは著者の指摘するとおりである。当時の発言を、後の結果から理解・判断するのではなく、当時の事情に則して理解・解明することが求められる所以であろう。

さて以上は本書の「言説分析編」、すなわち前半を紹介したに過ぎない。実は後半には「証言編」として、中国研究者を中心とする関係者十五名へのインタビュー記録が掲載されている。すでに本書の扱う時代から四十年以上経過し、人選などに偏りがあることは否めないものの、例えば一九五八年に一家で北京に移り住んだ西園寺一晃氏の証言をはじめとして、それぞれの証言は興味深く、それ自体が今後史料としての価値を増すものと言えよう。実はこのような戦後の中国研究者に対する聞き取り調査は、例えば台湾大学が戦後の中国研究の軌跡を明かにするために、アジア各国・欧米を跨いで実施しているといった例があるものの、従来必ずしも積極的に行われてこなかった。個人でこれだけのインタビューを敢行し得た点、また前半の実証的言説分析にオーラルヒストリーの要素を組み入れることで、より説得力のある議論を試みようとしている点は多いに評価されるべきである。今後、戦後の中国論のみならず日本の思想を考える際にも本書は有効な見取り図を提供したと言える。（せき・ともひで氏＝東京大学大学院博士課程・中国近現代史専攻）

中国認識の形成過程に迫る

データを駆使した興味深い実証

関　智英

★ばば・きみひこ氏は学術博士・東アジア論・日中関係論専攻。早稲田大学大学院博士後期課程満期修了。著書に「『ビルマの竪琴』をめぐる戦後史」など。一九五八（昭和33）年生。